

## 渋江長伯『官遊紀勝』について

### ——紀行と遊覧記の合体——

江戸時代の紀行文の、それ以前とは異なる特徴の一つに、長編化ということがあげられる。とりわけ、同一の人物によって、各地方への旅を題材とした大部の紀行が記される例が多い。貝原益軒の諸紀行をはじめ、古川古松軒の東西遊雜記、吉田雨岡の槃游余録等、それらの多くは、芭蕉の系統をひく短編の俳人紀行とは違った、記録的地誌的な性格を備えており、見聞した事実を正確に伝達する平明な文体と、豊富な記事の内容が当時の読者に歓迎されたことが、書肆の広告、あるいは序跋等からうかがわれる。だが、一口に長編化といってもその内容はさまざまであり、一々の事例について見ていくことが必要であろう。本論では江戸の後期、幕府御葉園掛として活躍した本草学者、渋江長伯の『官遊紀勝』全八巻をとりあげて、その内容のあらましを検討したい。なお、これらの長編紀行は、古松軒の場合に顕著のように、記事の内容が各藩の内情にふれて他見を憚られるものもあってか、多くは写本で伝わり、また板行の際に内容を改変する。<sup>1</sup>この『官遊紀勝』も、板行はされず、すべて写本で現存する。

板 坂 耀 子  
(一九八三年九月一〇日 受理)

### 一 書誌

国書総目録には、国立国会図書館、筑波大学図書館、尊経閣文庫に各一点、内閣文庫に二点、計五点の異本を示す。<sup>2</sup>その他、無窮会図書館に一本を見た。

この中に作者の自筆本と見えるものはない。比較的良好なのは、次の三本である。

①筑波大学図書館蔵本。八冊。27.0×18.5cm。白表紙。七行書。挿画に彩色あり、第八冊の本文末尾に、「右官遊紀勝八巻者法眼長伯奉台命遊干甲州紀也乞而摹之 文化十三年乙亥十月 直曲庵主人」の奥書を有す。各冊の外内題と丁数(及びその中の挿画の丁数)は次の通りである。

外 題		内 題		丁 数
官遊紀勝	峡中行上 乾	峡中行上		38 (19)
〃	峡中行下 兌	峡中行		37 (22)
〃	酒折湯鳴記 離	酒折湯鳴記		22 (14.5)

〃	岩堂記	震	岩堂記	大泉記	8	(5.5)	12	(9.5)
〃	大泉記	巽	遊御嶽記上	26	(18.5)			
〃	遊御嶽記上	坎	遊御嶽記中	23	(16)			
〃	遊御嶽記中	艮	遊御嶽記下	22	(15)			
〃	遊御嶽記下	坤	遊非崎記	34	(26.5)			

(傍線筆者)

外題及び内題で示すところと、内容は対応している。<sup>3)</sup>

② 国立国会図書館蔵本。四冊。26.4×18.2cm。白表紙。「福田文庫」の朱印。奥書は「右官遊紀勝八卷合成四卷者法眼長伯（以下①に同じ）」となっており（傍線筆者）、「峡中行」上下を第一冊、「酒折湯嶋記」と「岩堂記」大泉記を第二冊、「遊御嶽記」上中を第三冊、「遊御嶽記」下と「遊非崎記」を第四冊として合冊する。見てのとおり、甚だ便宜的な合冊であり、各八冊の表紙も外題も①と同様のものを、そのまま残して合綴する。奥書の次の丁に、別筆で以下の書入がある。

慶應四辰年三月六日求之 槐尚軒

甲州記

官遊紀勝八冊

峡中行 上下 乾兌

酒折湯嶋記 離

岩堂記

震

大泉記

遊御嶽記 上中下 巽坎艮

遊非崎記 坤

これによると購入者も八冊と意識しており、また甲州記なる別名も存した模様である。

③ 尊経閣文庫蔵本。八冊。27.1×18.4cm。地模様入緑色表紙。貼題箋。第一冊の中表紙に「甲府紀行全八本」と記される他は、外題その他①②と同一である。ただし奥書は②と同じで、八冊本であるにもかかわらず、「合成四卷」の部分が残る。②を書写した可能性もある。

以上の三本は文字その他よく整い、誤字も少い。挿画も正確に模写され、③の第一冊などは全面に淡彩色が施される美本である。ただ③に限らず、彩色は各冊によって異り、後半になるに従って無色の画が大半となる。また③には、わずかではあるが、正確、適切な朱筆が入る。

次に、やや後の写本と思われる三本をあげる。

④ 内閣文庫蔵本。八冊。26.3×18.3cm。外題は「官遊紀勝 一」の如くで、漢数字により巻を示す。それによると一〜八冊の順序は、一・「峡中行上」、二・「遊非崎記」、三・「遊御嶽記上」、四・「遊御嶽記中」、五・「遊御嶽記下」、六・「峡中行」、七・「酒折湯嶋記」、八・「岩堂記」「大泉記」（内題による）となっており、①③本と大きく異なる。また①③本にあった文化十三年奥書を有しない。字配り等全体の形式は①③本とはほぼ同様でよく整うが、きわめて誤字が多いため、底本等には適しない。

ただ、巻の順序の異同については、①③本も第二冊「峡中行下」の内題を④と同様の「峡中行」とのみ記するなど不明な点があり、単に④本のみ混乱とはまだ言いきれない。

⑤ 内閣文庫蔵本。三冊。23.5×17.0cm。白表紙。貼題箋。外題は「甲州官遊紀勝之圖記共三 江君確亭紀行 天」（第一冊）で、第一冊の前

半24丁に「序(1)・峽中行(10)・酒折湯島記(2)・岩堂記(0.5)・大泉記(1)・遊御獄記(2)・遊御獄記中(2)・遊御獄記下(2)・遊韭崎記(2)」の順に収録(巻毎に丁移りをしないが、括弧内はおよその丁数)され、残り24丁及び第二冊(55丁)、第三冊(63丁)は、すべて挿画をまとめて載せる。奥書は①本と同一。

⑥無窮会蔵本。一冊。26.3×18.7cm。白表紙。貼題箋。「井上氏」朱印。外題「酒折湯島記」。但し内容は「酒折湯島記」21丁の他に「遊御獄記上」(25丁、冒頭部欠落)及び「峽中行」33丁(下のみ、それも冒頭部欠落)を合綴する。奥書を有しない。挿画は全て極彩色。かなり後の写本である。

## 二 作者

「寛政重修諸家譜」「改訂増補日本博物学年表」(昭和九、白井光太郎)「改訂増補日本薬園史の研究」(上田三平著、三浦三郎編)等によれば、『官遊紀勝』の著者渋江長伯は、宝暦十年、太田元達惟長の四男として生まれた。母は村山氏である。通称は虬。他に西園、確亭と号する。三代氏胤以来の医家、渋江家の八代陳胤の娘を娶って養子となり、安永八年四月八日、二十才で九代を襲した。同年八月二十八日將軍家治にまみえ、寛政五年十二月二十日奥詰医師となる。翌二十一日から御薬園担当となった。

その前年の寛政四年七月、火災によって飯田町九段坂、また一番町、三番町等の御用屋敷等が焼失した跡地を、幕府は火除植物場として確保し、九段坂に一、一番町御堀端に三、三番町に二、の計六ヶ所を薬園として、寛政七年長伯の預りとした。その他、渠鴨にも薬園があり、同様に長伯の管理だった。文化元年には武州新座郡の辻村、片山村、練打村

等の御林六ヶ所に薬草植付場を新たに開いて、その管理もまかされ、「化政の頃、薬園の発達に(長伯は)最も功績が多かった。」(「日本薬園史の研究」と言う。

長伯の業績はこのように、まず有能な幕府医官として、薬園の管理とその発展に寄与したことにある。中でも、彼の経歴中、注目せられるのは、寛政十二年、44才の際の蝦夷採薬行であろう。これも、官命によるものであって、三月二十四日江戸を出発、北海道に渡り、東海岸沿いに厚岸に至る。江戸帰着は九月二十七日であった。一行は三十四人、中に土岐新甫、近藤元良、成島良輔、谷元且らがいた。

当時著名な本草家の小野蘭山とは、長伯はさして交際した風がない。だが薩摩の藩医で本草家の曾占春とは親しかったようで、占春は、長伯が帰国後、編した『蝦夷草木志料』に次のような序文を記す。

西園うしは、はたとせはかりのたふとき友たり。ことにその身におふる業は世にまれなる、おなしまねひなれば、春のあした秋のゆふへにも往徠をたのしみける時、朝廷の仰ことありて天放ひなの使におもむき給ふらむ。かくミその家のわさなれば、えその千しまの山つもの海つ物を探いたしけむとて別にけり。すてにはとへすして、おなしとしの秋の末にかへり給へり。頼にきたしゐて、世にめつらしき事ともを聞侍らむとせしに聞してやといひけるに、あし垣のもしほをわたり世にしらぬあつけしてふ跡をすきて、もろらむにいて、あふたの山をこえ、えさしにいたり、むら肝の心をくたき、そこはかとなき嶺山の谷川をたとり、思ひまとへる深霧を耕し、あらかねの土の下なる岩ねをうかち、繁木千くさの花や葉をきりと、胡蝶の帖におしつくるひ(中略)、うつしゑにして海つ藻はまでも、えのこし侍らすもて来りけり。(中略)うしかへりていまた

席も暖かならざるに、その千々の種々を並しける、けにちはやふる神の御代よりみし人もなき、くにに似ざるものを瞬息の間にミテ夷の名を書とり、我國の史にいてし名と他しくにの名を思ひくらへは、蝦夷志の料に備へんとてなん(下略)

長伯は他に、この蝦夷旅行によって『蝦夷紀行』『蝦夷採葉記』『東夷物産志稿』を記している。この内『蝦夷紀行』は巻9、10のみが函館市立図書館に現存する。挿画を交えて、日付に従い見聞を記していく、記録風の旅行記である。後二者はいずれも国会図書館の白井文庫に存し、蝦夷地の動植物魚介類の名を列記し、説明を加える。特に『蝦夷採葉記』は、東京農科大学にあったという原本を、明治二十四年に白井光太郎氏が叔父松田直人氏に模写させたもので、雲母入の紙に淡い彩色で、草花虫藻魚介を、半丁一―五丁ずつ描く、246丁という大部の、きわめて美麗なものである。

おそらく、この蝦夷地調査の関係もあって親交が深まったであろう長伯の友人に、他に近藤静齋がある。静齋が文政二年、浪速に赴任する際に長伯が送った長文の『送静齋近藤先生赴任浪速序』(白布に筆写。東大史料編纂所蔵。「確亭」朱印あり)が残る。その中で彼は「余訂交已三十餘年」と述べ「静齋西至瓊浦東窮蝦夷諸島天涯海角足跡數千里」と讃える。また、彼の才を嫉んで浪速へ赴任させた官吏たちへの強い怒りを表明する。

「徳川期の本草学は、初めは支那を学んだのであるから、其の書籍も又学問の研究の仕方でも支那によったのであるが、末期に近づき、欧州博物学の来訪が少くなく、又種々の博物書も渡来し、其を研究する人も少なくなかったために、其の思想が書籍の上にも著はれて来た。然し紀原は

支那本草書の輸入複製研究に始まっている。」(東京科学博物館発行「江戸時代の科学」中、「江戸時代の本草学」矢野宗幹)と言う。後述の如く、長伯は和歌よりも漢詩を好み、先の静齋を送る序文や、東京大学図書館蔵の『熊胆考』<sup>7</sup>は漢文で記され、白井文庫蔵の『本草発解』『西園蓮譜』『煙草譜』<sup>10</sup>等は、それぞれ漢籍から本草関係、蓮花、煙草の記事を抜粋書写したものである。当時の知識人の教養として以上に、長伯は漢文を自由にあやつれる自負を持っていたようである。

だが、矢野氏の述べる如く、本草学の性質上、長伯は欧州の風物とも多くかわる機会を持った。

既に寛政六年、江戸を訪れたオランダ公使らの一行(オランダ商館長ヘムミイ、外科医ケルレルら)の旅宿へ、五月四日に、桂川甫周、栗本丹州、大槻玄沢、佐藤有仙、宇田川玄随、森島中良らとともに訪れ、対話して物産の事を論じたとある。(「改訂増補日本博物学年表」)また、文化四年の夏には、オランダ船が高さ三四尺の檳榔樹を持って来て、江戸に運び將軍の覽に供した。その後この樹は長伯に預けられ、薬園で育てられた。三年間で一丈余の高さとなったが、文化六年の冬が厳寒であったため枯れたという。更に文化六年には、長伯自身が幕府に願ひ出て、「ショームルといへる紅毛工業字書」(「日本博物学年表」)を講入し、オランダ通事、馬場作十郎に、その書中の西洋硝子吹方を訳させ『西洋硝子製法書』<sup>11</sup>三冊とし、実際にガラス器を作って、將軍に献じた。また文化十四年には、やはり長伯の建言によって、幕府は長崎奉行に命じて中国から綿羊を買入れ、巢鴨の薬園で飼わせている。これは後に三百余頭に増加する。年に二度毛を刈りとり浜の御庭の薬園で布を織らせた。当時、羅紗の輸入が増加しつつあったのを防ぐためだったようである。(「日本薬園史の研究」)

幕府侍医であり薬園総管という公務を持ち、責任ある立場で生きながら、当時は「夷のはて」（曾占春序文）であった蝦夷地へも足を運び、一方で欧州の文物にも目を向け、しかもガラスや綿羊の例にみる通り、常に実物の製造にまでたずさわる長伯は、科学者と能吏の、視野の広さや行動力を備えていたといつてよい。

果鴨の薬園は、子の長庵が継承し、文久三年の医学館薬品会鑑定人には、曲直瀬順正、村田寿庵らとともに長伯の名も見えるが、晩年の記事は少なく歿年も不明である。なお今後、調査したい。

### 三 内容

この紀行の題材となったのは、長伯の年譜上で蝦夷旅行について目につく、長期の旅である。文化六年、九月から十一月まで、幕命により甲州に薬園を創開し、駿・甲・豆・遠の諸州に採薬を行った際のもので、随行者は小林修・藤田仁・榊原惟徳・近藤惟昌・梅野好武・飯田景・多賀谷驥らであった。

以下、日程に従って『官遊紀勝』各巻の路程のあらましを記しておく。

「峡中行上」は八月二十八日の江戸出立から、新宿、染屋村、玉川、日野、大和田、八王子、小梨、大杉、小佛嶺を経て、与瀬、藤野、関野、九月一日諏訪原に至る。「峡中行下」は、ひきつづき九月二日に上の原を発ち、瀧川を越え、恋塚、中野、大月、白野、黒埜（黒野田）、駒飼、平田、中嶋、石和、笛吹川、酒折、板垣、を経て、三日甲府の町に入る。

「酒折湯嶋記」は九月九日から十二日まで、おそらく公務の合間をぬって、龍山に登山し、山八幡、善光寺、酒折天神に参詣、信玄古城跡を

見、法泉寺、湯嶋を経て甲府の宿に帰る。

「岩堂記」は「九月の下旬官事の暇」に、甲府に近い岩堂観音に参詣したもの。「大泉記」は十月三日、同様に大泉寺に参詣したもの。「遊御嶽記」は上中下巻をなすが、内容は十月六日、甲府から御嶽神社に参詣し、羅漢寺を経て帰宿する、一日の旅の記である。「遊韭崎記」も十月十七日、雲巖寺と新府の城跡を訪れた小旅行を材とする。

左記の内容からもわかるが、「峡中行」上下二巻と、以後の紀行とは、若干、性質を異にする。即ち前者が、江戸から甲府までの七日間の旅を行程に従って記す、紀行文の典型の形となっているのに対し、後者はいずれも、甲府の宿を基点に、近隣の名所古跡を訪れる、いわば遊覧記といった類のものである。そのためか、当時から「峡中行」上下二巻は、他と区別され、まとまった一紀行として考えられていたらしく、上巻の冒頭には、やはり多くの紀行文を残した成島司直が序を記し、下巻の末尾には、甲州旅行に同行した榊原惟徳が跋を記して、きわめて完成した形式になっている。

しかし、それにもかかわらず、この紀行の写本が『官遊紀勝』として、以後の遊覧記めいた部分も常に含めた形式での写本として残されたのは、後半の遊覧記的部分の方に、むしろ見るべきものがあり、読者に歓迎された故ではないかと思う。

書誌の項で筑波大学蔵本の各巻の丁数をあげた。それによっても明らかなく、一日の近距離の遊山を記した「遊御嶽記」「遊韭崎記」等が、数日間の比較長途の旅程を記す「峡中行」上下とはばかわらない分量を持つ。当然、記事の内容は、精細になり密度が高くなっている。

近世の紀行文は、芭蕉の「おくのほそ道」の如く、巧みな虚構も利用して一つの架空の作品世界を作りあげた特殊な例は別として、次々と地

名が変化し、作者が街道を移動していく、そのこと自体が読者を感動させるといった魅力をもはや持ちにくくなっている。空間移動そのものに、それだけの魔力が、もうない。読者はむしろ、旅の中でもなお存在する日常生活の描写に興味を抱くか、あるいは旅先の土地自体に知的な関心をよせる。前者は後に一九の膝栗毛物の成功の土壤となり、後者は、順路をすべてはずして、単に各地の奇談の集大成として、自らの旅行記を再編した橋南谿「東西遊記」の人氣に、その典型を見ることができさる。

今、帝國文庫に収録された、近世の紀行類を見ると、東海道や木曾路の長途の旅行記に混って、藤原為景『嵯峨遊覧記』、清水浜臣「杉田日記」などが、異色の小品として、新鮮である。これは当然のこと、同じ量の紀行なら、長途のそれが、いずれも地名を羅列した千遍一律のものに終りやすいのにひきかえ、一つの場所の一日の遊覧を記す方がはるかに特色ある内容を持つことができるであらう。観桜、観梅を中心とした短編の遊覧記が、近世紀行の中で欠かせない存在となっているのも、そのためである。

『官遊紀勝』八巻にも同様の傾向が認められる。後半の六巻は、比較的長文のものも含めて、すべて遊覧記の性質を備えているといつてよい。対象がしばられ、一つの記事に費される文章の量が多いため、それだけ強い印象が残るのである。

「峡中行」では、最も詳細な猿橋に関する記事にしても、

橋の長さ拾壹丈、橋より水に至る三十余尋、兩岸より木を積てかけはしになしたるなり、土人の云、昔し智恵ある人の工夫にて猿の木梢を傳ひ川を渡るを見て此橋を作り始たるといへり、兩岸の岩ハ水底より切立て流も此に至りてハ漩をなして流る。水の深も三十尋と

いへり。誠に險要の地なり。

といった程度であり、他は、「殿上村又戸野上村に作る。此にて葉王山を望む。山上に両耳を立たる如し。川に添て行。岩殿山流れを隔て高し。」の如くである。「此峠白御影石の柔かなる山なれハ左右の嶺白浪の立たるに似たり。」といった美しい描写や、「左り川辺細道を十五六歩も行、小さき堂ありて堂の向に壁もなし、山崖の石壁なり。案内の水を採来て石面にかけてすこし離れて見るに、石紋自然と隠起して地藏の像をなす。長式尺斗手に宝珠を持たる趣儼然たり。造化の妙なる人智の斗りへからさる事も多し」のような珍しい記事もあるが、全体の印象はやはり単調の感をぬぐえない。

「酒折湯嶋記」には、「峡中行」の筆致がまだ残り、記事の羅列が多い。ただ、その内容が細かくなっているのがわかる。次の「岩堂記」「大泉記」は共にきわめて短いため、観察は更に詳しくなっていく。

みちの傍に岩舟地藏あり。地藏尊の舟にのりたるなり。同じ姿にて三体ならひあり。これ追々にこしらへたと見へて古き方ハ石も苔むして尊ふとも思はるゝなり。(岩堂記)

この様な凝視は「峡中行」には記されなかったものである。また「大泉記」の末尾には、信玄の廟所に曾我兄弟の墓があることに疑問を抱き、寺僧に尋ねて、聞かされた奇妙な伝説を紹介する。

大泉の開山禪師行脚のとき富士の裾野に至るに日も暮て離れ屋に宿をとりたるか、あるしのいへらく、我弟五郎時致ハ甲斐の国武田信虎の子となれり、貴僧の彼地に至る頃ハ出生もせん、此刀の目貫を帯て行て見たまへといひて家も人も失ぬ。其後甲斐に至りて信虎を訪ぬるに男子出生なしたれと鳴もやます。左の手を握りて開かずより其目貫を出して加持なしたれば、手の内に亦目貫をにきりてあり

たり。其宿縁をもちて曾我の墓を建置よし。全く佛家因縁はなしに  
て信するにたらされども聞まゝに記しぬ。

批判しつつも、土地人の話を紹介している所に、これまでとちがった  
新しい姿勢が見えている。

このような、ある意味では余裕の生じたことが、続く「遊御嶽記」冒  
頭の「己この冬十月六日官事の餘暇御嶽の山水他にことなると聞ぬれハ  
鶏鳴のころ旅亭を出て」という、常套的ながら、ゆつたりとした文体を  
生み、更に「石橋あり。其傍に石碑あり。宝永六丑年ニ建る所なり。橋  
供養の爲なり。其文辞ハ見るにたらずといへとも難るところなれハ此に  
記す。」といった、先の曾我伝説とも共通する姿勢を作つてゆくのであ  
ろう。

しかし何といつてもこの「遊御嶽記」の庄巻は道傍に次々登場してく  
る奇石怪石の描写である。今日の昇仙峽にあたる地域で、画図も充分に  
交えて、長伯はそれらの石の一つ一つを紹介する。登場する岩石は、名  
前だけあげても、次の通りである。

かめ石・板石・獅子岩・大黒岩・坐人石・さけ岩・穴明岩・穿眼石  
・幕引石・掛幔石・動石・兜岩・佛龜石・つし岩・鞍かけ石・さと  
う石・寒山石・拾得石・梵音塔・坐禪石・筆石・大日岩・烏帽子岩  
・臥龍石・太鼓石・風切岩・猫岩・狐石・猿石・天狗岩・履石・仙  
掌石・虫喰岩・枕石・腰かけ石

それらの各々については、「しはらく行、山坂を折曲り上る式丁斗  
り、獅子岩あり。山腹にあり。其内に三番目の獅子尤も大なり。口の吻  
より木なと生たり。山の如き石なり。獅子石の数七十五頭あるよし案内  
のもの云へり。」「次て兜石の山、峯頭の石白く兜の形に似たり。耳し  
ころまでもあり。後ろに松壺本生たり。傍の山白石にて立浪のことし。

其趣人工の及ふ所にあらず。かふと石の下に丸き石のわれたる様なるか  
其中に又丸く穴あきて穴の大き四五尺に深さ式尺にたらぬ程に見ゆ。傍  
に其ふたにもなるへき石のつきてあり、案内之ものに問ふに名もしらさ  
れハ漫に佛龜石と名けり。兜石の次に見ゆる山を鞍かけ石といふ。山ハ  
皆黒岩にて岩角鋒刃をならへたる如く石骨あらわれ出て、其山のなかハ  
ころに馬鞍の形によく似たる式丈四方くらゐもあらん石あり。又山の  
絶頂にも同じ形の石あり。岩の角に別にのせたる如し、最石色ことな  
り。」と、描写は正確で細かい。風景自体も奇景であつたのだろうが、  
長伯が余分な記事を記さず、専ら奇石のことに絞つて、たたみかける  
ような記述を行っているのが、ひときわ効果をあげている。「岩堂記」  
「大泉記」といった短編を記していく内に、自然と、題材を選択する手  
法が身についたものであらう。

そして、最後の「遊韭崎記」は、題材としては御嶽登山ほど恵まれて  
いないにもかかわらず、文学的には最も完成を見せている。

十月十七日夜もしらけたるに朝かれいとりした、めして馬屋ちを立  
出て百石町筋より青沼にかゝりぬ。道のかたはらに身延海道のしる  
へ深く石にゑりてありぬ。新町を過ぎて川風のいと寒く、きぬ重た  
るも衣手薄く覚ぬ。月もすみわたりて若川の川波氷を流すやとうた  
かひぬ。川原廣く水音も高きにあやしけなる橋式つかゝりて橋くの  
もなけれハ中たわむやうに覚ぬ。

この冒頭と「峡中行上」の「八月廿八日江戸を発し新宿に至る。諸友  
餞別の詩文を携て旗亭に會す。離筵益溢談笑数刻に及び雨微々として降  
る。分れて興乗す。此日相會するもの七八十人。夫より雨行。旗谷に至  
る。」を比すと、単に漢文調から和文調へ変化したというだけでなく、  
觀察の深化と、表現の練達が見てとれる。「峡中行」では道から見える

薬王山の記述も簡単であったが、ここでは、

此里ハ村なれハ八ツの嶽ならんと思ひて行ぬる内に雪深くおゝひたる峯の遙に見へぬ。其形ハ富士に似たれと峯広く八にわかれ峯ことに形ちハ富士の姿あり。里人の語れる、富士と高きをくらへぬるか少しひくかりしをいきとおりて、峯を八ツにわかちたりといへり。我其ことを思ふに、左あるへき事もあるまし、世の人のわか力をはからず、ひとにまさらんと思へハ其身にも益なきたとへくさにて、ひかことせぬ為の古き教へなるへし。

と、前後の状況や自身の考察も加えて、詳しい。新府の城跡についても、今も堀出される焦米や蕎麦のことを記し、「險を頼むもの亡ふる、国を治るハかならず徳に有なり。覇図帳として已ぬるかな。一世の莫雄も風鶴の勢におとろへ慨歎の興自から索莫たり。」と己の感懷を述べる。また、末尾に近く、次のような記事がある。

田所のくろ道を経て大なる川原あり、田舎の人に其名を問ふに白澤といふ。余か供のもの笑て今白澤をハ過て来りしに又白澤のありぬるやといへハ此ハ餘り澤といふといへり。田夫の欺ハ昔より皆同じかるへし。

土地人の表情をよく伝える挿話であるが、「峽中行」の段階であれば、この種の記事は特に記されることはなかったかもしれない。

『官遊紀勝』は、このように、八巻の間に作者の紀行文作家としての発展変化が明瞭に見られる。とりわけ後半の遊覧記的な部分にその成果が結実しており、そのために後半が切りすてられず、八巻として伝わりつづけたのであろう。

ところで、この紀行の、もう一つの特徴としてあげておかねばならな

いのが、挿画の多用である。書誌の項の丁数の内訳を見てもわかるとおり、巻によっては本文とほぼ同量になる。特に「遊御嶽記」の奇石の描写では、本文と相補って、大きな効果をあげている。<sup>12)</sup>

先述の曾占春の序文からもうかがわれるように、本草学者にとって、写生は、動植物を記録する上での欠かせない手段であった。また、趣味にまかせて、自己の持つ珍しい動植物を写生して板行する者もあった。先述した長伯の『蝦夷採薬記』なども、その種の写本であろう。国会図書館には別に、『西園叢譜』<sup>15)</sup>という長伯の小冊子の写本があり、これは106種に及ぶきのこのスケッチを収録する。

『官遊紀勝』の挿画の中には、長伯自身らしい人物が写生をしている様子が、風景中に書きこまれるものもある。また「酒折湯嶋記」では、「其祝司飯田大蔵の家に、日本武尊の火打袋を傳へ持たるといふ。多賀酔雪、画も工なれハ行て其形ちをこひ写して来れり。」との記述がある。彼らの旅の中に写生が、今日の写真のようなかたちで、存在していたことがわかる。

近世紀行の場合、挿画の役割が重要とは必ずしも言えない。しかし、『官遊紀勝』の場合は、これらの画は紀行の一部となっており、本文と一体のものとして、とらえておく必要があるだろう。かりに翻刻紹介する場合でも本文だけでは、おそらく、あまり意味があるまい。

他に幾つか目にとまる、この紀行の特徴について記しておく。

「遊非崎記」などでは、かなり和文調になるとはいえ、長伯の文体は基本的にはやはり漢文の簡明さと歯ぎれのよさを持っている。近世の紀行文作家たちの多くは、見聞した事実を正確に他人に伝達するために、最も都合がよかったのであろう、このような、漢文の性格をとりこん



だ、平明で明解な和文を駆使する。これは、彼らの多くが、中世以前の紀行が持つことのなかった新しい題材として、古戦場に強い興味を示し、軍記物を愛読していたらしいことも関係する。近世紀行文の一つの基礎を作った貝原益軒にも見られるように、軍記物の文体は、彼らの文体をかたちづくる大きな要素となっている。<sup>13</sup>

特に、長伯の場合、『官遊紀勝』で漢詩は作っても和歌をまったく詠まず、引用する紀行文は荻生徂徠の漢文の「峡中紀行」であり、「櫛田村より行ハ惣明寺といふ黄蘗宗あり。(中略)古歌なども多く有よし。余歌の道にくられハ其まゝに過ぬ。」(峡中行上)と記すなど、かなり明確な嗜好が示されている。

長伯の、本草学者としての特色は、この紀行には必ずしも充分にあらわれていると言いがたい。

「萩窪の茶店に憩ふ。(中略)其名ハ萩くほといへと見る所萩もなけれハ」

「夜中雨又しきりにふる。雨の音芭蕉にそゝくに似たり。されとも庭中に芭蕉もなく、燭をかくけ見れハ葉蘭青々と茂りたり。葉蘭一名に一葉といへるハ琉球使畧に出たり。」

「社拝殿左右に末社多く社の後に大なる銀杏樹あり。八九人の抱ゆへき程なり。森の中にも大樹多し。」

「田畝も過ぎ左右松林にて初葺なども多く出るよし、俱したる者など皆々林に入て捜せとも一ツもとり得す」(峡中行上)

「此辺にえそ萩といへる草多し。えそ萩ハ仙台などの名なり、此辺にてハをばすかしという。」

「左りに高山を望む。倉岳といふ。山腹に櫛木の大木あり。女郎木と

いふ。」

「宿の後ろの山を菊花山といふ。(中略)山上の岩を打かけハ菊の花の紋付たるあり。人を遣りてとらしむるに山急にて僅に見るも足さる程の事なり。」

「又燃石といひて炭の代りになる石もありといへり。石炭なるへし。」(峡中行下)

「此山にハ紫の薄くしおての葉に似たる菰莢あり。芋葉の大茯苓ニも似て刺あるものなり。水引草の長葉ニて厚きも只大石の多きのみ。」(酒折湯鳴記)

こういった記述はあるが、いずれも特に本草学者でなければ書けないものではない。

長伯の肩書と、この紀行との関わりを求めるならば、むしろ『官遊紀勝』という書名が示しているように、この紀行が公旅の合間に書かれたということ、宿泊も行旅もすべて保障された旅であり、しかもそれが必ずしも、紀行作成上マイナスの要因とはなっていない、ということであろう。近世の紀行文が読者をひきつける大きな要素は、豊富な記事の内容であり、とりあげる題材の珍しさである。それを作者が得るためには、長途の旅を心おきなくできる条件が必要となる。貝原益軒の諸紀行も大半が公務上の往來を工夫しての名勝遊覧である。古川古松軒の『東遊雜記』は奥羽巡見使一行に加わっての旅である。作者自身の感受性や観察力はむろん欠かせないものであろうが、そのような、すぐれた個性で、限られた材料を巧みに作品化していく、といった作業にはもはや限界があり、近世の紀行文の主流は、少々記述は雑であり構成は粗笨であっても、より多量の新しい情報を読者に与える作品の方へ、時代が下るに従って移動していくようである。先述した遊覧記的な作品が好まれる

ことと、これは矛盾するようではない。要するに、その行程から得られる限りの、新鮮で多様な題材を、最もよくすくいとれる旅のあり方が歓迎されるのである。

そうすると、ある程度恵まれた条件のもとで、個人的には何の気遣いも憂いもなく旅をする方が、紀行作成の上では望ましくなってくる。中世以前の紀行では欠かすことのできなかった、旅人自身の心の憂い、あるいは作者の個性すらもが、豊富な事実を見聞し、正確に記していくには、むしろ妨げとなるのである。近世の、たとえば女流紀行などに、作者の個性が色濃くにじみ出た、すぐれた作品は多いが、情報提供源としての紀行文を楽しむ読者にとって、そのような個性の発露は、事実を過剰に色づける、もどかしいものでしかなかったろう。そういった読者が求めた作者の個性とは、自己の内面に没入していく類のものではなく、見聞した情報事実を、正確に取捨選択し、整理し、余分な感傷をつけ加えずに読者に紹介、説明する、その拠り所となる精神であり、思考形式なのである。

『官遊紀勝』八巻に、浜江長伯の個人的懊悩や、旅の上での苦勞話はいつさい登場しない。実際になかったのかもしれないし、記されなかっただけかもしれない。だが、この紀行の読者たちは、それを欠点とはしなかったはずである。個人としても、旅行者としても、何の苦勞も悩みもない旅人が、体験し見聞した事実をそのまま伝えてくれることこそが、読者の望んでいたことであった。『官遊紀勝』という題名の示す「何の憂いもない旅人」という条件は、近世の紀行文に読者が求めている基本的な要望を、よくみたすものであったことを、あらためて指摘しておきたい。

なお、貴重な資料の閲覧をお許し下さった各文庫と図書館に、深く感

謝する。

#### 註

- 1 益軒の場合もそうであり、古松軒は写本でも、流布本系に既に大巾な改変がある。
- 2 他に「旧浅野」が示されるが、これは現存せず。
- 3 筑波大学図書館は、現在学外者には原本の閲覧を許可しない。したがって①本に限り、図書館の記録と複製本による記述である。
- 4 「上」の文字はなし。
- 5 「日本博物学年表」はこの書を曾占春の編とする。また「蝦夷採集記」凡例にも「此行（蝦夷行）採集セル腊葉當時薩藩侍医兼東都医学館藥品鑑定曾占春氏之ヲ検定記述シテ蝦夷草木志料一巻トナシ以テ世ニ傳ヘタリ」と記す。東京国立博物館、北海道庁等に写本があり、筆者が見たのは無窮会蔵本。写本一冊。21.6×16.0cm。
- 6 他に「蝦夷地歴遊日記」（函館市立図書館）があるが未見。また「北遊草木帖」は現存しない。
- 7 写本一冊。23.3×16.7cm。茶色表紙。全12丁。八行書。朱入。「渡部文庫」印。「文化十一年十月十二日久野平治写之越智直澄蔵」奥書。熊その他の獣の肝の効能、採取法、調剤法を記す。
- 8 写本一冊。23.7×16.5cm。青色表紙。全10丁。「此書者官醫浜江長伯所著也枇杷園小野氏幽軒写之」奥書。本草関係の書目、語源等をあげ、「此按——」として考察を加える。
- 9 写本一冊。26.3×18.6cm。橙色表紙。全33丁。「原書ハ博物局ノ所蔵当掛参考ノ為メ借写シテ保存スルモノトス明治十七年三月農事編纂掛」と中表紙に記す。蓮花に関する詩文を集めたもの。
- 10 写本二冊。22.6×15.0cm。第一冊47丁。第二冊59丁。九行罫紙使用。煙草関係の詩文を集めたもの。序跋奥書等なし。
- 11 この書は現存しない。ただし白井文庫には「製造秘要」（写本一冊。25.4×18.5cm。青色表紙。）なる一書があり、これは焰硝の製法について長伯が答申したものである。薬園掛といいながら、多方面の仕事にたずさわっていたことがうかがわれる。

12 ①⑥の写本は、これらの挿画もすべて模写する。非常に正確な模写で、彩色の多少に差はあるが、他は区別が困難な程である。

13 「峡中行上」でも「青柳村より立川村の茶店にやすらふ。関東兵乱記扇谷ノ五郎朝良大將軍トシテ武州立河原ニ陳ヲ張ル山内ノ管領民部大輔顕定入道可諒并当屋形齋房東八刃ノ軍兵ヲ催シ永正元年甲子九月廿日立河原へ押寄タリ」などの引用がある。

14 白井文庫蔵。写本一冊。19.0×13.6cm。白表紙。全10丁。朱あり。六行書。草、木、芝、魚、介、蟲附龍蛇、禽、獸に分類して「コルコニ」「ツナカイ」等、名を示して簡単な説明を加える。

15 白井文庫。写本一冊。19.5×12.6cm。白表紙。半丁毎に一〜二種のきのこのスケッチと説明を記す。末尾に「昭和七年四月十三日大阪書肆松雲堂ヨリ購得西園ハ波江長伯氏ノ号ナリ此書同氏自著原稿本ナラン蝦夷産ノ菌二三ヲ載スルアリ以テ波江氏ノ作ニ成レルヲ証スベシ白井礫水識」とある。